

OB・OG 各位におかれましてはご健勝にお過ごしのことと存じます。

さて、令和 7 年 11 月発行のこうとさいど 65 号から WEB 化（ホームページへの掲載）しましたが、最初（昭和 35 年）にこうとさいどを発行された学年の主将であった西山様から「こうとさいど」創刊からの熱い思い、メッセージが寄せられましたので、会員の皆様にも次の通りご紹介（共有）させていただきます。

淡水軟式庭球クラブ

### 「こうとさいど」について思いつくままに（創刊からの思い）

令和 7 年 12 月 24 日 西山 隆（学 11 回生）

今月初め「こうとさいど」65 号（令和 11 月発行）を受け取りました。

今回は淡水軟式庭球クラブ（OB・OG 会）の会員諸氏からも寄稿文が寄せられています。OB・OG 会の「こうとさいど」ご担当も決められ有難いことです。当クラブ会員の寄稿文が多くなれば「こうとさいど」を通してクラブ会員の交流が深まり、淡水軟式庭球クラブ及び現役への関心も高まり自ずと会費の納入も増えることが期待されます。

冊子の発行は今回限りで次号以降は大学軟式庭球部ホームページの掲載に移行する由、いつも目にできて触れられてページをめくる感触は冊子でないと出来ず残念ですが、時代の流れでもあり致し方なく受け止めております。

ホームページのこうとさいど 65 号も見ました。写真がカラーで良いし、これをプリントして製本したら自分だけの冊子が出来そうで、試そうと思っております。

「こうとさいど」は学 11 回生軟式庭球部部員が中心となり昭和 35 年 5 月 1 日に創刊致しました。前にも述べたことがありますが、部誌を出す目的は部の記録を残すのと部員間および先輩諸氏との交流を深めることですが、先輩諸氏を訪れて寄付を集めるための手みやげとすれば、寄付のお願いもし易くなるだろうとのアイディアから生まれたものでした。

初めての試みだったので創刊の担当をした桃井君、高野君の戸惑いはかなりあったらと思います。部員も原稿を書いたり集めたり、広告取り（資金集め）に手分けをして取り組みました。あまり記憶には残っていないのですが、「こうとさいど」を携えて先輩諸氏を訪れ寄付のお願いをしに回ったと思います。

○「こうとさいど」を創刊した当時の 11 回生の部員は次の諸氏です。

（故）桃井麒一郎君（前主務）と（故）高野幸一君が創刊担当、私西山隆（主将）、（故）秋元良太君、川本幸夫君、（故）清水三次君、玉川弘志君、（故）南茂昭夫君、前田利明君、【（故）木村秀一君も在籍していましたが何故か創刊号から住所録に記載がありません】

以上 10 名。

12 回生以下の部員も手助けをしてくれました。

○「こうとさいど」は創刊から今 65 号まで一回だけ発行されなかった年はありませんでしたが、65 年間も継続して発刊されたことは奇跡に近いと思われます。後輩諸氏の並々ならぬご尽力に敬意と感謝の念に堪えません。創刊をした学 11 回生を代表して継続発行して頂いた後輩諸氏に感謝致しております。

○「こうとさいど」を創刊号から全ての号を保存されていた学 12 回生(故)福島弘哲君（元淡水軟式庭球クラブ会長）は「こうとさいど」の恩人です。かつて個人で保存するより学校に寄贈し保存した方が良いとご本人に進言したことがあります。その後ご本人から寄贈した旨の連絡を受けました。聞かなかったのか聞いて失念したのか、学校の何処に保存されているかは分かりませんが、アーカイブとして末永く保存されることでしょう。

○そして「こうとさいど」を創刊したのは学 11 回生であることを、是非とも当クラブ及び会員の皆様に記録と記憶に残して頂きたいと希望致しております。

私儀ですが 80 歳を迎えた記念に「こうとさいど」創刊号の復刻版を 100 部作成し、淡水軟式庭球クラブに寄贈致しました。「こうとさいど」を創刊した学 11 回生の生き残りとして、「こうとさいど」が忘れ去られることなく継続されるようにとの思いでした。その思いから、近年「こうとさいど」の読み手から書き手の一員に加わるようになりました。これからも思いが変わることはないでしょう。

あと 2 年足らずで 90 歳を迎えます。「こうとさいど」のために何か記念となるものを残したいと考えておりますが、良い案が浮かびません。前回と同じ程度の負担で出来ることを考えております。「こうとさいど」が 70 号 80 号そして 100 号達成と末永く継続することを祈念し、そのために良い案があればご助言を頂きたく宜しくお願い致します。

取り留めのないことばかりを思いつくままに・・・。